

書 評

『大正・昭和の鳥瞰図絵師

吉田初三郎のパノラマ地図』

(別冊 太陽)

平凡社 220×290mm 150ページ

2002年10月刊 2,400円

独特の様式で多くの鳥瞰図を描いた吉田初三郎(1884~1955)という人物を、古地図研究の視点から初めて研究の対象にしたのは、古地図研究会を主催していた師橋辰夫(1930~97)であったといわれている。そして彼の周りには、初三郎鳥瞰図のコレクターであり、かつその研究をこつこつと進めていた何人かの人々がいた。また、少数ではあったが、初三郎が鉄道会社の依頼で多くの沿線案内図を描いていた事実注目し、鉄道史と観光史の研究の狭間でその意義を評価しようとする人もいた。たとえば、評者の立場に近い分野では地理学者の中川浩一や鉄道経営史家の小川功などの論考がある。これまでいくつかの初三郎の鳥瞰図に関する断片的な研究が発表されてきたが、本書は初三郎の全容を初めて総合的に明らかにした文献である。

鳥瞰図という表現形式は地図と絵画の中間形態であろうが、読図についての知識や訓練がなくても誰でも理解できるという点で江戸時代のむかしから用いられてきた。「〇〇名所図会」と呼ばれる当時のガイドブックでは、しばしばこの鳥瞰図の手法が用いられている。そして鳥瞰図に独自の手法を加え、近代の観光宣伝分野で広く普及させたのが吉田初三郎であった。初三郎は商業美術というジャンルがまだ社会的に低く評価されていた時代に、鉄道会社の沿線観光案内図に独特の手法を導入し、これが評判となって、71歳の生涯の中で極めて多くの作品を世に送り出すとともに、多くの鳥瞰図絵師たちの活動の先駆となった。初三郎の独特の手法とは、スポンサーとなった鉄道会社の路線や駅、観光資源、沿線景観などを大きく目立つようにデフォルメし、色彩を効果的に用いた美しいパノラマ形式の細密画に仕立てる画風にあった。本書に収録された彼の作品を見ると(本書88ページ「初三郎初期の鳥瞰図」に収められた「京阪電車御案内」や「参拝要覧鹿島香取神宮」参

照)彼の画風が時間の経過とともに大きく変わってゆくプロセスがわかる。

初三郎の鳥瞰図は、1913(大正2)年、京阪電気鉄道の依頼で描いた沿線案内図「京阪電車御案内」が最初だそうで、当時の皇太子(のちの昭和天皇)が大変気に入られて御嘉賞になり、初三郎も「図画報国」の信念を新たに、ますます洗練されたこの種の鳥瞰図作成につとめて、やがてマスコミによって「大正の広重」と呼ばれるようになる。その生涯に描いた鳥瞰図は1,600点に及ぶという。初三郎の鳥瞰図はそれを注文したスポンサーによって大量に印刷されて配布されたから、各地の郷土博物館などを見学の際に少し注意してみると、印刷されたものは結構見る機会が多い。近年の初三郎鳥瞰図の人気を背景にその復刻すら行われた。評者のように多少の関心はもっている程度の者でも、原画の展示を何回か見たことがある。しかし、その全容(ないしはそれに近い状態)が明らかにされたのは、やはり本書によってであるといつてよいであろう。

本書の最大の特徴は、極めて多数の初三郎の鳥瞰図をカラー版で収録し、初三郎研究の第一線に立つ研究家の適切な解説やリストを掲載したことにある。本書に収録された彼の鳥瞰図は、評者が数えた限りでは、表紙や折込図を含めてカラー版143点、そのなかの一部を拡大して示した図が29点に及ぶ。この他、論説中に提示されたモノクロ版が小さいものを含めて15点(別にその拡大図1点)ある。このように、多くの初三郎鳥瞰図が、本書の大部分を占めるページを使って、見事な色調の印刷で表現され、適切な解説とともに掲載されている。

鳥瞰図の本書のなかでの配列は、数点ないし十数点を一まとめとして、「自在一大胆なデフォルメ 変幻自在が旅情を誘う」、「沿線一列車は走るよ真直ぐに 鉄道沿線図の潔さ」、「富士—あ、あんなところに! いつでもどこでも富士の山」といったタイトルがつけられて区分されているが、もちろん、とくにこれらがきちんとした分類でなされたものではなく、鉄道の沿線案内図は他のタイトルの中にも見られるし、富士山が描かれた図

もここだけで見られるのではない。しかし、プロの編集者によって書かれたと思われるこれらの感性的な表題—キャッチフレーズといってもよい—は初三郎鳥瞰図の特徴をずばり表現していて、共感できるものが多い。

初三郎は鳥瞰図だけを描いていたのではなく、雑誌の挿絵やポスターなどの作品も多かった。本書の主たる対象ではないが、1ページだけ「初三郎コレクション（抄）雑誌・絵はがき・ポスター」が紹介されている。

本書は初三郎の作品を並べただけのカタログ然としたものでももちろんなく、貴重な労作ともいうべき彼の作品のデータベースとその分析、多くの初三郎に関する優れた研究論考が満載されている。

巻頭に掲載された荒巻宏「分かりすぎる絵の秘密—吉田初三郎作品—」、泉眞也「世界は編集することで見えてくる」、山本壽夫「吉田初三郎の空間 絵になるまちづくり—一問の手法—」などは、作家やデザイナーによるエッセイであるが、初三郎の作品を「鑑賞」する立場ではなかなかポイントを押さえたものと評価できる。データベース的な資料として貴重な「吉田初三郎年譜」（吉田初三郎研究プロジェクト）は、1996年秋に予定されていたが実現しなかった師橋辰夫の講演資料として芳賀直樹が作成したものをプロジェクト・メンバーたちの知見を加えて補訂したものという。芳賀直樹は本書編纂の企画を進めたこのプロジェクトの中心人物ともいうべく、同じく多大の時間と労力を投じた成果である貴重なリスト「初三郎鳥瞰図を採す—都道府県別作品目録—」を作成している。さらに、「初三郎の才能をいち早く見抜いた男・油屋熊八—別府のゴールデンコンビ—」と「天皇の絵師としての初三郎—二荒伯爵と本山大毎社長、徳富蘇峰らの影—」の解説にも活躍する。

同じく「吉田初三郎研究プロジェクトは如何にして生まれたか？」は、師橋辰夫の周囲に集まったコレクターであり、研究者でもあるグループ同人たちの研究活動のプロセスを語っていて興味深い。また、もう一人のプロジェクト・メンバーである藤本一美も「初三郎と同時代を生きた鳥瞰図絵師たち」と「初三郎の原画を見に行こう—原画に出会える場所—」の2編を執筆し、これもまた初三郎研究の深さをうかがえるものである。さらに師橋辰夫が1997年、彼の死の直前に行った講演の記録である「大正広重 昭和源内」は初三郎鳥瞰図の特徴とその考え方を生き生きと描いている。「インタビュー 初三郎鳥瞰図コレクター石黒三郎さん」では、この人物に「収集したものから、謎が解けてゆく。格別な喜びです」と語らせ、個人的なエピソードではあるが、初三郎研究についての重要な証言が紹介されているのが面白い。

本書の編纂に関わったこれらの研究家・コレクターたちは各地を廻って数多くの初三郎鳥瞰図に接し、長年にわたる膨大な現物の観察に基づいて緻密なデータベースをつくり、分析を進めている。このような重厚な研究手法こそオーソドックスなものとして高く評価すべきものであり、大いに参考とすべき面が少なくない。

本書は「別冊太陽」というムック風の一般書ではあるが、その中身はまさに学術書並みであり、吉田初三郎の作品とその研究成果の集大成として高く評価できよう。そして、最初にも述べたように、地図史や商業美術史の研究成果としてみるだけでなく、鉄道史や観光史の歴史地理学的な研究の上でも、本書は貴重な研究素材を提示しているといえる。あるいは、観光情報としての初三郎鳥瞰図のもつ意義付けといった視点も今後開発されてもよいのではないだろうか。

（青木栄一）